

…………… 新学長、新校長、大いに語る！ ……………

中高大連携をより密接にし 教育内容の一層の充実をめざしたい

2018年4月、大学では笠原清志学長、中高では松井真佐美校長が新たに就任されました。
そこで、山田徹雄教学担当常務理事を聞き手に、
さまざまな角度から新学長・新校長のお人柄に触れるとともに、これからの抱負を伺いました。



跡見学園 常務理事・事業理事
山田 徹雄
専門は経済史、経営史。2017年度まで8年間跡見学園女子大学学長として、大学の新学部・学科設置をはじめ、教育改革に尽力してきた。2011年6月から2018年3月まで財務担当常務理事。2018年4月、教学担当常務理事に就任。2017年6月より事業理事。

跡見学園中学校高等学校 校長
松井 真佐美
担当教科は数学。大学卒業後、企業に勤務。出産のため退社し、専業主婦を経て母校である跡見学園の教員となる。リフレッシュ方法は身体を動かすこと、音楽を聞くこと。

跡見学園女子大学 学長
笠原 清志
専門は組織論と労使関係。学生時代のユーゴスラビア留学、ポーランドやバングラディッシュでの豊富な海外体験を持つ。趣味は健康維持のための散歩と健康食品を買い集めること。

**ご専門を選ばれた
きっかけは？**

山田 はじめに、お2人がそれぞれのご専門を志すようになったきっかけからお聞きしたいと思います。まず笠原先生から。

笠原 私の父も大学教授で社会学が専門でした。しかし、私が社会学を学ぼうと思ったのは、父の影響も多少あったのですが、自分も社会の一員であるということを意識したのが大きかったと思います。自分を理解することとは社会を理解することになり、同時に社会を理解することは自分を理解することにつながるという社会的な思考を大切にしたいと思ったのです。

山田 松井先生は、どのようなきっかけで数学をご専門にされたと思うのですか。

松井 高校時代に文系・理系を考えた時、文系の勉強はやる気があれば社会に出てもできるが、理系は大学でないと学べないと思いました。数学を専攻したのは、この社会で数字を使わないところはないと思ったからです。

山田 先生は大学卒業後、企業に就職し、出産を機にしばらく専業主婦をされていたと。どんな



きっかけがあつて母校の先生になろうと思われたのですか。

松井 出産後、跡見の恩師から数学の教師の採用試験を受けてみないかというお話をいただいたのです。子どもがまだゼロ歳児で、数学からもしばらく離れていたのが初めは躊躇したのですが、せっかくチャンスをいただいたのだからと試験を受けることに決めました。

芯の強さが長所の笠原学長 松井校長は大ざっぱと自己分析

山田 今回は、事前によくつか質問をさせていただいています。そのなかで、「長所・短所は？」という問いに対して、笠原先生は「持続する芯の強さ」が長所だとお答えになっています。これは言い換えれば「ぶれない」ということだと思いますが、学長という立場になると、学内のさ

さまざまな意見を集約し、時には自分の主義主張を抑えて妥協することが必要になる場合もあるのではないのでしょうか。

笠原 おっしゃる通りだと思います。自分の思いを押し付けては学校運営は成り立ちません。学内のいろいろな意見を謙虚に受け止めて、そこに自分なりの考えも反映しながら方向性を定めていく、そうしたバランス感覚が求められると考えています。

山田 松井先生は、ご自分の性格を「大ざっぱ」だと分析されていますね。数学の先生と言うと緻密な方が多いのではと思っていました（笑）。

松井 「大ざっぱ」というのは、いい意味で「大らか」と言えるのではないのでしょうか。教師というのはほぼ100%ヒト相手の仕事で、常に生徒と接しています。ですから、プライベートで

落ち込むようなことが

あっても、生徒の前ではいつも明るく、元気でいなくてはいけません。その意味で、大ざっぱで大らかというのは得な性格だと考えています。

ただ、仕事をするうえでは緻密さが要求される

ことが少なくありません。その点は、周りの先生方や職員の方々にサポートしていただいていると痛感することは多々あります。大ざっぱというのは長所でもあり、短所でもあるのでしょうか（笑）。

学生時代に旧ユーゴを訪問し 市民の生活に触れた笠原学長

山田 次に、お2人の学生時代について伺いたいと思います。笠原先生は、大学時代にセルボクロアチア語を自ら学んで、旧ユーゴスラビアを訪問されたそうですね。

笠原 私の学生時代は、学生運動や社会変革のうねりがまだ残っていました。そのなかで、私は社会学の理論よりも社会的なものの方に重点を置きたいと考えました。学生時代に旧ユーゴスラビアに留学したのも実際に社会主義国家の下で、人々がどのような暮らしをしているのか、この目で見てみたかったからです。

山田 実際に、市民の生活をご覧になられてどのように思われましたか。

笠原 社会主義国家全般に言えることですが、モノが不足し、交通

インフラが整備されていないという点ではユーゴも同じでした。そのなかで、家族を守り、養っていくために、人々は助け合いのメカニズム、すなわちインフォーマル（非公式）グループをつくり、互いに助け合っていました。グループのなかには必ず「医師」と「スーパーマーケット店員」が必要とされていました。医師がいれば、子どもが病気になったときに診てもらえる、スーパーマーケットの店員は砂糖やコーヒーなどの生活必需品を融通してもらえると、といったように、モノ不足の社会だからこそその知恵が働いているわけです。

今思うと、当時のユーゴは典型的な多民族国家で、さまざまな文化が共存する多文化共生社会でした。現在問題になっている外国人労働力や移民の受け入れなどについて考えるに当たっても、ユーゴ留学の経験は大きな財産になったと思っています。

山田 笠原先生は、今も「目的のない旅に出ること」が趣味だということですが。

笠原 仕事で海外に出ることが多いのですが、これまで訪問したポーランドやインド、バングラディッシュなど、いずれも仕事

大ざっぱという自分の性格は、長所でもあり、短所でもあると思っています。



勇気を持って一歩踏み出すことで、自分自身を大きく成長させることができます。

る時間の方が長いほどでした(笑)。現在は多忙でなかなか楽器に触れることはできませんが、大学の演奏会などにはできるだけ行くようにしています。

山田 現在は、ピラティスに取り組まれているとか。

私はどうもピラティスとヨガの違いが今一つわからないのですが(笑)。

松井 ピラティスの方が体幹を鍛えるため、筋トシ的な要素が強いのではないのでしょうか。教師は体力勝負なので、体の芯を少しでもしっかりさせようと始めました。初めは筋肉痛になったりもしましたが、だいぶ慣れました(笑)。

一歩踏み出す勇気を持つてほしい(笠原学長)

山田 今回は、お2人に「おススメの1冊」というものも挙げていただきました。笠原先生は『失敗の本質』(野中郁次郎ほか著)を勧めたいということですが。

笠原 この本は、敗戦を日本軍の組織論的研究から解き明かそうというものです。日本の企業などの組織体は、成功例は広く開

示するものの、失敗したケースは隠そうとする傾向が強い。これでは同じ失敗を繰り返すことになるでしょう。成功例よりもむしろ失敗例から多くのことが学べるのではないか。そう考えて、私は学生にもまずこの本を読ませてから、講義に入ることになっています。

というのも、今年の入学式でも申し上げましたが、私は学生に失敗を恐れず、「一歩踏み出す勇気」を持つてほしいと願っているからです。「新しい現場に自分を置くことですべては始まる」私はこう思っています。当然そこでは困難にぶつかることになるでしょう。その現実を受け止め、誰も助けてくれないという状況で迷い悩みながら、それでも自分なりの結論を導いていく。その経験が自分を成長させてくれると思っています。

現代は、もはや大学内だけで教育が完結する時代ではありません。大学が核となり、企業や地域社会、国際社会と連携しながら学生を育てていかなければならない時代となっています。学生の皆さんもインターンシップや海外留学など、大学を飛び出してさまざまな学びの場に、

勇気を持って一歩踏み出してほしいですね。

しなやかで凜とした女性に(松井校長)

山田 松井先生のおススメの本は、杉本鉞子さんの書かれた『武士の娘』だ。この本は、翻訳書なのですね。

松井 著者の杉本鉞子という人は、明治6年に長岡藩の家老の家に生まれ、日本の貿易商と結婚し、20代そこそこでアメリカに渡っているのです。そして、現地でお嬢さん2人を産み、ご主人が亡くなった後、一度日本に戻り、再度アメリカのニューヨークに渡航している。この本は、その時に書かれたもので、アメリカで日本人初のベストセラーとなった書でもあるのです。

山田 この本のどんなところに惹かれたのですか。

松井 グローバル化などという言葉がまったくなく、昭和初期にかけた動乱期に、日米の懸け橋となり、時流に流されず、毅然として自分の生き方を貫いた杉本さんの姿勢に感銘を受けました。私は常々生徒たちに「しなやかで凜とした女性」になってほしいと呼びかけていますが、彼女

終わった後にすぐに帰国せず、現地をあてもなくブラブラして、人々の生活ぶりや街の様子などを見るのが好きなのです。表面的でない、本当のその国の姿が垣間見られることが多いからです。

松井校長の趣味は工芸、音楽、ピラティス

山田 松井先生は跡見中高時代、机上の学習よりも理科の実験や工芸など実習がお好きだったようです。もともと手先は器用だったのですか。

松井 そうですね。今でも編み物は比較的得意で、子どものおくるみなど自作していました。

山田 音楽もご趣味の一つだと。

松井 大学時代、オーケストラに所属していて、皇太子さまと同じヴィオラを担当しており、数式を見ているより譜面を見てい



こそ、まさにそれを地で行った女性だと思っています。

山田 先生は、学校案内などで「しなやかで凛とした女性」と並んで、「自分をプロデュースできる女性」になってほしいと述べられていますね。

松井 自分が、企業〜専業主婦〜教師とさまざまな経験をしたなかで、働きながら子育てをして、女性は本当に忙しいと実感しました。女性は笠原先生のおっしゃった「一歩踏み出す勇氣」が必要とされる場面が非常に多いのではないのでしょうか。

だからこそ、どんな場面でも、自分がどんな立場になっても、しなやかに事を受け止め、凛とした姿勢で物事に向かい、かつ自分自身というものをしっかりと表現し、自分の考えを表明できる、すなわち「自分をプロデュース

スできる」女性になってほしいと願っているのです。

大学の知を中高に還元し 学園全体の活性化を図る

山田 お2人は、どんな生徒・学生に跡見に来てほしいとお考えですか。

松井 跡見は女子校なので、すべて女子で行わなければなりません。さまざまな場面で、自分が思ってもいなかっただ役に就くこともあるでしょう。それによって、思いがけない自分の適性を発見することも少なくないのです。ですから、自分自身の可能性を発見したい、いろいろなことにチャレンジしたいという人に、ぜひ跡見の門を叩いてほしいですね。

笠原 私は、学生を見る時に、①知的好奇心があるか、②社会性

があるか、という2点を重視しています。学びに対する強い意欲があると同時に、今の自分の生活は家族、学校の先生、地域の人々など多くの人の支えによって成り立っているということを自覚しているか否かが重要です。他者に対する感謝の気持ち

ちを忘れない女性に入学してほしいと思います。

山田 自身は、跡見のなかの学びや生活に満足せず、積極的に外に目を向け、行動する、柔軟な思考を持った学生の入学を望みます。そして、それに応えるシステムづくりを大学は進めていかなければならないと思っています。

一方、中高はより学力レベルのアップを図っていきたくと考えていますが、お2人は、これからの跡見学園をどのようにしていきたいか、抱負をお聞かせください。

松井 せっかく中高と大学が同じ敷地内にあるというメリットをもっと生かすべきだと思います。大学には高い専門性を持った先生がたくさんいらっしゃるのです。中高生が大学の授業を受講できるようにするなど、中高大連携

をさらに強めていきたいですね。それが学園全体の活性化にもつながると思っています。

そして、普段の授業が何より重要なので、さまざまな先生の意見を採り入れながら、活気あふれる授業を展開していきたいですね。

笠原 確かに、大学は人材の宝庫

ですから、それを中高にも還元しない手はないと思います。中高には大学の専門の知や人材をもっと活用していただきたいし、それが跡見中高の大きなアドバンテージにもなるでしょう。

大学には「目に見えるカリキュラム」と「目に見えないカリキュラム」があり、前者は学部・学科の新増設などによって充実してきました。今後は、海外の大学や研究機関、企業、地域などとの連携をより積極的に推進し、「目に見えないカリキュラム」の充実を図っていきたくと考えています。そうすることで、学生の知的好奇心を刺激し、一歩踏み出す勇氣をサポートしていきたいと思っています。

山田 本日は、貴重なお話を有難うございました。

インタビューを終えて

山田 本日は、4月から学園の教育機関の長となった学長、校長の抱負をお聞きすることができました。お2人には、今のお気持ち忘れず、それぞれの理想を大学、中学校高等学校の教育現場のなかで実現し、一層素晴らしい跡見学園を作り出していきたいと思っております。